

## 喫茶去

国立病院機構横浜医療センター

看護部長

山口 克子

10月の名残のお茶が終わると、<sup>ふろ</sup>風炉を片づけて炉を開く時季になる。炉開きと同時に「口切」となり、新茶の抹茶をいただく、私にとって至福の時となる。今日は私が楽しんで稽古を続けている茶の湯の話をしたい。

きっかけは二十数年前のある日、デパートの<sup>そえがま</sup>添釜（茶道具展覧会の側で行われている抹茶のサービス）の近くを通りかかったことだ。一服いかがですかと誘われ正座を理由にお断りすると椅子席に案内され、<sup>ちそう</sup>ご馳走になった。その時の和菓子の美しさ、おいしさと抹茶の緑に一目ぼれ、お茶の稽古に行くところなおいしい和菓子が何時も食べられるのかと思ひこみ、知人のついでで早速入門。しかし稽古を始めると正座は15分しか続かない、黒の楽茶碗を見るとたくわんを盛ったら美しいだろうかと思ひ、夏の<sup>ひらみずさし</sup>平水指を見てはそうめんがよく似合いそうなどと思う。稽古の初めは月毎に変わる和菓子の楽しさと抹茶のおいしさに<sup>ひ</sup>惹かれ、気がつくと終わりまで正座ができるようになり、先生の熱心ですねの一言に感激する。稽古中の先生のお話や宗匠の講義のお話が心に残り、お茶が楽しくなったように感じている。お茶は季節感をとても大切に、1年間を二十四節気（立春、雨水、<sup>けいちつ</sup>啓蟄、春分、清明・・・）で考えている。炉開きの時季については柚の色づくのを見てからとか、吐く息が白く見えるようになってからなどといわれている。茶室に入り季節を感じることは新鮮な驚きであり、茶道具への興味もでてくる。稽古を通じて、畳の歩き方、障子の開け方、お辞儀の仕方、挨拶の仕方や炭の扱いなどを学ぶ。とくに炭は現在私たちの生活に見られないもので、どのように炭をつげば早くお湯が沸かせるか、ゆっくり沸かすにはどうすればよいかなど稽古を重ね覚えるしかない。茶の湯に対する心得を示したといわれる「利休七則」は稽古初めより、聞かされることで「一、茶は服のよきように<sup>た</sup>点て、一、炭は湯の沸くように、

一、花は野にあるように、一、夏は涼しく冬は暖かに、一、刻限は早めに、一、降らずとも雨の用意、一、相客に心せよ」の七条である。本当に理解し、実践するまでにまだまだ遠いが「降らずとも雨の用意」については思い出がある。朝から快晴であった真夏の宗匠の稽古の時、お昼すぎ雷ゴロゴロ、スコールとなり座がいきなりどよめいた。すかさず宗匠の一喝、みんなでしゅんとした。稽古の帰り道、私が「今日のようなことがあるから降らずとも雨の用意ですね」と話すと、先輩は「用意していると気持ちに余裕があるね、でもお茶に招かれ急の雨になった時、席主にお客の雨具の用意を心配させないようにとも聞くわね」と話された。私は常に相手のことを考えることに感激して、その後常に傘を持ち歩くようになった。

稽古の年数を重ねると水屋の仕事が始まるが、「よい仕事は清潔で整頓された環境から始まる」を<sup>おしえ</sup>訓に、清潔に始まり清潔に終わるのが水屋の仕事と指導を受ける。お茶は口に入れるものだからと、道具一つ一つの置き場所が決められ手順を覚えていく。そのころ先生に言われたことで印象に残っていることが「席中での<sup>てま</sup>お点前の足の運びの音と茶道口を出てからの足の運びが変わることがないように」である。客の前と客の目から離れたところで少しも心を変えてはいけませんよといわれたようで、身の引き締まるような感じがした。私にとって茶室は非日常空間そのもの、一歩入ると何もかも忘れることができる不思議な空間である。仕事のことで苦しかったり、悩んだりした時、おいしいお茶を点てることを念頭におき、結果的に何度もお茶に助けられたと思う。茶は私にとって楽しいことなので、多分身体が動く限り日々の茶の湯の稽古は続けるだろう。茶の湯に興味をもたれた方は、一度おいしい和菓子と抹茶の体験をおすすめする。

「まあ、お茶をおあがり」